

【優秀賞】NHK 松山放送局賞

「人権と向き合う」

八幡浜市立八代中学校 1年 此上 凜

今は世界中で、携帯、スマホ、パソコンなどの情報端末は、日常生活に欠かせないものになっています。それは、暮らしを豊かにするし、自分の興味のあることについて深く調べることができる、とても便利な物です。また、コミュニケーションや地域活性化のツールとしても活用されています。私も両親との連絡ツールとして、スマートフォンを持っています。けれど、中学校に入学した春、使い方を間違えると危険な面もあることを実感しました。

私のクラスでは、大半の生徒がスマホを持っています。入学したばかりの頃は、新しい友達との生活が始まり、緊張感に包まれていました。その中で、仲良くなった友達と無料のコミュニケーションアプリで、連絡先を交換しました。最初は、新しい友達が増え、その友達とより仲良くなれた気がして、うれしい気持ちになりました。しかし、その後、そのアプリ内で学年グループという名のトークルームが作られ、学年の半分以上の生徒が属する大きな場に私も招待されることになりました。人数も多く、知らない同級生もたくさんいたので発言こそはしませんでした。そこでのやり取りは、目にしていました。

最初は他愛もない会話でしたが、次第に人をばかにする内容があったり、許可なく友達の写真をグループ内で拡散したりと、人を傷つける行為が行われ始めました。私は、これはいじめだと思いました。それを止めていた人もいたけれど、面白おかしくはやし立てるような雰囲気は止まりませんでした。私自身も利用して感じていることですが、アプリ上のトークでは顔が見えないため発言しやすく、通常より気持ちも大きくなりやすいと思います。また、文章だけでは意図が伝わりにくく、相手に冷たい態度と受け取られることもあり、誤解が生じることも少なくありません。何事にも、メリットとデメリットがありますが、きっと学年グループでもちょっとした誤解の積み重ねがトラブルへと発展したのだと思います。それが、あっという間に、複数で一人をターゲットとする「いじめ」へと変わってしまったのです。

ある日、学校の先生がそのことに気付き、緊急学年会議が開かれることになりました。その会議では、現状の確認と今後の対策方法を話し合いました。様々な意見が出ましたが、グループトークができる場所を作っているのかという内容

で意見が割れてしまいました。そこで、全員で利用する際のルールを決めることにしました。私達がそこで考えたのは、「一度相手の立場になって考え、相手が傷つく内容ではないことを、確認してから送信する」ということです。全員で考えて決めたルールを守り、相手を思いやる意識を持てば、コミュニケーションツールとして正しく使用できると思うし、絶対にそうしてみせると私は思っていました。

その日、家に帰ってからもずっと、私は緊急学年会議での話し合いのことを、考えていました。そして、そのときの先生の一言が強く心に残っていました。

「アプリのトークで発信はしていなくても、友達が傷つけられているところを目にして、見て見ぬふりをしたら、それは傷つけた人と同じことをしているんだよ。」

私は、後悔しました。反省しました。まさに、私はそのときに勇気がなくて、注意することができなかったからです。いじめだと気付いていたのに、何もできなかったからです。今までに、いじめ問題を扱った授業をたくさん受けて学んできたから傍観者もいじめの加害者だと分かっていたのに、どうすることもできなかったのです。私は、もうこのようなことは二度と起こしてはならないと思い、悩んだ結果グループを抜けることにしました。もし、また似たようなことが起こったとしても、私にはまだ、しっかりと注意できる自信がないからです。絶対今度は注意しようと思っていますが、勇気が出せないかもしれないのが怖いからです。私はもう、加害者にはなりたくありません。相手を大切にすることや、間違ったことをしている人に注意することは、一対一のやり取りでも大切なことなので、今はそれを忘れないよう、一生懸命自分と向き合っています。

それ以降、アプリ上での問題は今のところ起こっていません。ケンカや小さな問題はあるみたいですが、それぞれが相手の気持ちを考えながら生活しているように思います。今回の経験で、私は、コミュニケーションの取り方が多様になった今だからこそ、人を思いやる気持ちや人権への意識が薄れてしまうのかもしれないと思いました。便利な情報ツールに頼りすぎず、ネットモラルを意識しながら、正しく使用し、楽しい中学校生活を過ごしていこうと思います。